

# すべての価値相対主義・無神論・唯物論の道は、ペドフィリアに通ずる

「もし神がいなければ、すべてが許される」——ドストエフスキー

Greatchain

2018/07/30

あの意味深の「グーグル翻訳」のバグが、「終わりの日の時計は12時3分前を過ぎている。我々は、世界のこの劇の、役者やその展開を経験しつつある」と言っている。これは前から私が言っていることで、今起こっていることは現実だが、同時に演劇でもある。今のところ悪役の代表は、ヒラリー・クリントン、オバマ、ジョージ・ソロスなどであろう。彼らは「悪そのもの」を体現する者たちだから、まっしぐらに悪の道を進み、役を裏切ることはない。かれらは確信犯として、罪の意識を見せたことはなく、これも現実の演劇と同じで、観客への教訓を残して近い将来、終わるものと思われる。ただし、我々の参加も劇の一部である。我々が主演として、この劇をひっくり返すという、すばらしい可能性も残されているだろう。

悪には、戦争の悪も、隠ぺいや騙しも、私服肥やしも、贈収賄の悪もあるが、究極の悪はペドフィリアであろう。我々がこの一線を公然と越えたときに、神と悪魔の本当の戦いが、本格的に始まると考えられる。ドストエフスキーは、「もし神がいなければ、すべてが許される」と言った。そう言った彼自身に、どこまで想像できたかわからないが、現在、彼が言った通り、神が否定された結果、あらゆる考え得る恐ろしい悪が、タガが外れたように、地球上に一気に解き放たれ、咎める者が誰もいない有様である。彼は、人間の悪には、どうしても許すことのできない限度があると言い、それは子供に対する残虐行為だと言った。そして現実か空想かわからない、いくつかの例をあげている。彼がペドフィリアを考えたどうかかわからないが、たとえ考えたとしても、その当時、口にはできなかつたであろう。いやむしろ、今起こっていることを、彼は空想さえできなかつたであろう。

これを書いている最中にも、こんな恐るべきニュースが送られてきた：——

**カトリック教会：子供を強姦することは、ペドファイル聖職者の**

## “宗教的自由”である

高位バチカン聖職者が、ペドフィリアを選ぶ“自由”を主張

ミルウォーキーの大司教管区による、墮落した、不安を与える声明において、カトリック教会のある高位僧が、ペドフィリアは神によって聖職者に許されていると主張した。

この邪悪なコメントは、Timothy Dolan 枢機卿によるもので、それは、僧職仲間が子供虐待によって訴えられることを防ぐために、教会の財政をあるトラストに移管することを決定した後で、発表されたものである。・・・

メディアは、これや、法王のサタン転向宣言などを、何も起こっていないかのように無視し、これを我々の文化の直面する最大の危機だと力説するプーチン大統領を、軽蔑し無視している。これは彼らが、ペドフィリアを支持しているものと解釈できる。なぜなら、無神論的立場を取るメディアが、「俺は神などというものを信じないが、ペドフィリアは許せない」と言ったとすれば、それは通らない理屈である。同情的に見ても、彼らには物を書いて収入を得る者の責任感が見えない。そういう仕事はやめるべきである。同情的に見ることが可能なのは、ここまでのことが大規模に起こるには、サタンの憑依のような影響力が働いているという想定が可能だからである。しかし、彼ら唯物論者にそれはできないから、ますます悪循環だ。

また、27日のニュースにこういうのがある：——

専門家：子どもセックス取引の蔓延は“ペドフィリアの常識化”

(normalization of pedophilia) による

子どもセックス取引が、流行病のレベルに達するにつれて、ある事情に詳しい人は、“**道徳的流動性**” **moral fluidity** と、真理を知らないことが、この問題の背後にあると主張している。

「常識化」というのがキーワードである。サタンの恐ろしさは、単にペドフィリアをはやらせるだけではない。それを異常なことではなく、正常（当たり前）なこととして「ノーマライズ」することである。私は「なしくずし」という言葉を使ってきた。この人は「道徳的流動性」という言葉を使っている。犯罪行為を、気づかないうちに文化として定着させようとする

ることである。彼らの目的は、人間を支配する神（自然具有）の道徳を、なし崩しにサタン文化に切り替えさせることである。そうしてこそ初めて神に勝つ（神から人間を奪う）ことができ、そのためには、セックスのけじめをなくするのが最も効果的である。我々が知っている文化マルクシズム運動というものは、常にそういうものだった。結婚には、一つでなくさまざまの形があってもいいではないか？ 男同士、女同志でもよく、もともと男と女は流動的なもので、最初から決まったものではないのだ、と彼らは、あたかもそれが真理であるように言っている。彼らの究極の狙いは、男女関係の完全自由化、すなわち根源からの人間破壊だったことが、やっとわかってきた。

ある英国保健センターのトップを長年続けてきたドクターが、「性別の流動性などというのはウソだ」と、本当のことを言ったために、クビになった話は先日、紹介した。自然界にはけじめがある。ダーウィン進化論のように、ずるずる動いているのではない。彼らが最も恐れるのは、科学者の論証する有神論的パラダイムが、思考方法の停滞を破って、学界や社会一般に根付くことである。組織化された宗教に属する人々が、盲信するような神ではない。

もう一つ、5月12日のニュースを紹介しよう：——

## 10歳の子供を強姦した男が釈放される——裁判官：「彼の宗教では OK なのだ」

ある裁判官が、このペド犯は、暴力によってセックスを持ったその子供を、「強姦しなかった」と裁定を下した。なぜなら、彼はそのような行動が「受容される」ような文化の出身だからである。

フィンランドの最高裁は、Pirkanmaa 裁判所の下した、前の刑務所判決の上告を求める検察官の要求を、却下した。

Juusuf Muhamed Abbudin は、2016 年秋、10 歳の少女に対して犯した性犯罪で、3 年の禁固刑を宣告された。しかし、裁判所は、彼がその子供と性的交渉をもったと認めたにもかかわらず、強姦罪は成立しないと行った。

2016 年の判決はこう述べている——アブディンは、この子供を“ガールフレンド”と考えた。なぜなら、彼がこの子供を乱暴に強姦したとき、彼女は抗わなかった。また彼

が政治亡命者としてフィンランドにやってきた、その出身国は、大人と子供との性関係が「ノーマル」であるような国だったからである。

要するに「ノーマル」と「アブノーマル」のけじめは、いくらでも「流動的」だということである。この子供の年齢は10歳だが、これは7歳にも5歳にも流動する。実際そんな例は、特に聖職者の場合いくらでもある。しかし、こんな場合に、釈放されて出てきた犯人を、関係者や自警団が待ち構えていて、殴り殺したという例もいくつもある。それくらい、天人ともに許せないという本能が、我々の内部に植え付けられているということである。この場合、フィンランドの裁判所は、何らかの圧力を受けていると考えられ、この犯人の本国でも、そんな関係が伝統的にノーマルということは、考えられない。要するにこれは、世界的な神とサタンの戦争の一局面と考えるべきであろう。